

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式							
		化学史(History of Chemistry)					全学共通科目 自然・科学		対面							
AA45N054																
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員									
選択		2	1・2・3・4	教・経・福	後期	月2	氏名 檜垣 勇次(理工)									
							E-mail y-higaki@oita-u.ac.jp 内線 7895									
授業の概要		自然科学は自然界の諸現象とそれに関わる物質について探求する学問であり、「化学」は物質の構造、性質および反応を究明する自然科学分野である。「化学」は、物質探求の純粋科学にとどまらず、物質に関わる物理/化学の応用による社会/産業への貢献が見込まれる学問体系である。このことから、文系専攻、理系専攻に関らず、大学人の一般教養として、「化学」の歴史認識と、現代物質観の理解は重要である。本授業では、古代から現代に至る物質観の変遷、物質を構成する原子や分子についての概念、現代における物質化学のトピックスについて講義し、グループワークとプレゼンテーションを経て、身の回りの物質や現象を化学の視点で解釈する素養の習得を目指す。														
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)									
目標1		化学史と現代の物質観について説明できる。					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
目標2		原子/分子の視点で物質/現象を解釈できる。						○				○				
目標3		他者との協働で課題を設定して調査できる。							○	○	○	○				
目標4		調査した内容を論理的に述べるができる。						○								
目標5																
目標6																
目標7																
目標8																
目標9																
目標10																
授業の内容																
1 授業のガイダンス：資料の配付、授業内容の説明、参考図書の紹介																
2 酸素の発見、酸/酸化の定義																
3 酸/塩基																
4 原子と分子																
5 放射線、放射能、原子力																
6 放射線被曝、放射線利用																
7 弱い力(水の科学)																
8 物質化学1：物質化学のトピックスを講義																
9 物質化学2：物質化学のトピックスを講義																
10 物質化学3：物質化学のトピックスを講義																
11 物質化学4：物質化学のトピックスを講義																
12 グループワーク：「化学」の視点で物質/現象を説明する。																
13 グループワーク：「化学」の視点で物質/現象を説明する。																
14 グループワーク：プレゼンテーション																
15 総まとめ																
ラーニング目標		A:知識の定着・確認		○	ミニットペーパー、グループ・ペアでの共同作業、ディスカッション、プレゼンテーション、質疑応答				工夫その他の		図表/画像中心の講義資料の活用、動画の活用					
		B:意見の表現・交換		○												
		C:応用志向														
		D:知識の活用・創造														
時間外学習の内容と時間の目安		準備学修	参考図書やインターネットを利用して、必要に応じて予習する(15h)。課題についての考察、プレゼンテーション資料の作成など、グループワークの準備をする(5h)。													
		事後学修	授業で学習した内容について、配布資料、参考文献を参考に復習する(15h)。課題について考察し、レポートを作成する(10h)。													
教科書		教科書を指定しない。														
参考書		参考書を指定しない。														
成績評価の方法及び評価割合	評価方法					割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	ミニットペーパー					80%	○	○								
	プレゼンテーション					10%			○	○						
	最終課題					10%	○	○								
注意事項																
備考																
リンク																
		URL														

担当教員の 実務経験の 有無	。
教員の实務 経験	民間企業（総合化学メーカー）で5年間勤務した。
実務経験を いかした教 育内容	産業の視点から化学現象を解説することで、実社会で活かせる知識を提供する。

ナンバリング			授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)		授業形式									
AA45N127			SDGs(SDGs) *大分を創る科目				全学共通科目 自然・科学		対面									
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員											
選択		2	1・2・3・4	教・理工・福	後期	火1	氏名 氏家誠司, 井上高教(理工) E-mail tinoue@oita-u.ac.jp 内線 09087862778											
授業の概要	2015年の国連サミットにて「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。これは人類と地球の繁栄のための行動計画として策定されたもので、2016年から2030年までの目標として「持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)」が掲げられました。17のゴールおよび169のターゲットから構成されており、地球上の誰一人として取り残さない、持続可能で包摂的な世界の実現を目指すことです。本講義では、このSDGsの基本理念や構造を講義やカードゲームを通して学び、SDGsに関する取組事例の共有し、SDGsについての理解を深めると同時に、自身の関心分野を切り口に、課題を見出し、他者と連携しながら持続可能な社会やまちづくりの実現のために、「今、何をすべきか?」「どこに向かうべきか?」、その解決策と将来像を構築します。																	
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
目標1	SDGsに関する基礎的な知識を持ち、他者に分かりやすく説明することができる。								○					○				
目標2	各種課題を「自分ごと」として捉えることができる。											○						
目標3	他者の意見を理解し、共に考え、議論することができる。									○	○		○					
目標4	SDGs推進の取組を提案することができる。									○	○	○	○	○				
目標5																		
目標6																		
目標7																		
目標8																		
目標9																		
目標10																		
授業の内容																		
1 ガイダンスと講義内容の概略と目的																		
2 カードゲーム第1回目																		
3 カードゲームの問題点/課題を考える。																		
4 目標1番～5番とそれらのターゲットに関する内容・事例・課題の説明。																		
5 目標6番～9番とそれらのターゲットに関する内容・事例・課題の説明。																		
6 目標10番～12番とそれらのターゲットに関する内容・事例・課題の説明。																		
7 目標13番～17番とそれらのターゲットに関する内容・事例・課題の説明。																		
8 事例紹介																		
9 カードゲーム第2回目																		
10 カードゲームの問題点/課題を考える。																		
11 事例紹介																		
12 グループワーク(課題を洗い出し、整理する)																		
13 グループワーク(それぞれの課題に対して、解決策を考える)																		
14 発表会および討論																		
15 総括および提案(重要なポイントに絞り、問題点・課題・対策を決定する)																		
ラック ニ ン イ グ ブ	A:知識の定着・確認		○	演習、小テスト、ルーブリックによる自己評価、グループでの共同作業、ブレインストーミング、KJ法					工 夫 の 他 の									
		B:意見の表現・交換	○															
		C:応用志向	○															
		D:知識の活用・創造	○															
準備学修		Moodleに資料等を配しておくので、配付資料や参考文献等の情報を必要に応じて予習する。(15h)																
事後学修		授業で学習したことを活かし、課題の完成度を高める。小テストや配布資料を用いて復習する。(15h)																
教科書		教科書は指定しない。授業中に配布するプリントや小冊子を使用する。																
参考書		蟹江憲史「SDGs(持続可能な開発目標)」, 中央公論新社, 2020, ISBN9784121026040																
成績評価の方法及び評価割合	評価方法						割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10	
	小テスト						25%	○	○									
	ブレインストーミング結果						25%			○								
	最終課題						50%			○	○							
すべての小テストおよび課題の合格を単位取得の条件とする。																		
注意事項																		
備考		カードゲームは対面で行う																
リンク																		
		URL																

教員以外で指導に関わる実務経験者の有無	。
教員以外 の指導に関 わる実務経 験者	SGDs公認ファシリテーター
実務経験を いかした教 育内容	SGDsカードゲームを通した地方創成の方法論を理解させる

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式										
AA42N018		カラダの見方・考え方(Ways of looking at Human Body)					全学共通科目 福祉・地域		対面										
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員												
選択		2	1・2・3・4	教・理工・福	後期	火1	氏名 牧野 治敏(教マ)												
							E-mail hmakino@oita-u.ac.jp 内線 7644												
授業の概要	人類が人間の体をどのように捉えたのかに注目しながら生物学の歴史をたどる。歴史上のトピックをその当時の常識や現代の観点など様々な視点から捉え直し、科学的、社会的、歴史的な常識とは何かをクリティカルに考察する能力を身につけるとともに、多様な文化とそこにある共通性に気づくことをねらいとしている。																		
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標1	人体描写をひとつ取り上げ、それに対する自分の捉え方を分かりやすい言葉で説明できる。								○		○								
目標2	唯物論的自然観に基づいてヒトの生物学的な位置づけを説明できる。								○										
目標3	西洋科学が日本の文化に影響を及ぼした事例を、一つ以上紹介できる。								○				○						
目標4																			
目標5																			
目標6																			
目標7																			
目標8																			
目標9																			
目標10																			
授業の内容																			
1	人体の扱い方から命の有り様を探る意味(授業の概略)																		
2	古代エジプトでの死体処理 1:ミイラはなぜつくられたか																		
3	古代エジプトでの死体処理 2:ミイラの加工法と後世での利用																		
4	古代ギリシャでの医師の仕事から命の考え方を探る																		
5	古代ギリシャ・ローマの科学の衰退と継承(中東諸国の役割)																		
6	陋習からの解放:ルネサンス期の画家たちは身体をどのように見たか																		
7	実践的な解剖学の復興:ヴェサリウスとその時代																		
8	ダーウィンの進化論からみたヒトの位置付け																		
9	霊長類におけるヒトの位置づけ:反復説と幼形成熟説をもとに考える																		
10	日本の事例(仏教思想による絵巻、江戸時代の人体利用ビジネス)																		
11	江戸時代の医術(漢方医と蘭方医のせめぎ合い)																		
12	ミイラ以外の死体保存術(諸外国の事例と南北戦争時のエンバーミング)																		
13	人のカラダの見せ方(絵、蠟人形、X線画像、樹脂加工、3Dデータ等)																		
14	人のカラダを部品の集まりとして考える(臓器移植と脳死)																		
15	性別をどのように考えるか(染色体・脳・外形など、生物学的性差をもとに)																		
ラックニング	A:知識の定着・確認		○ 授業中に学生の理解を促すためのクイズを出す		工夫その他の		視覚的資料のある事例をできるだけ多く取り上げ、具体的な事物から話を進め、理解を促すよう工夫している。												
	B:意見の表現・交換		○ 毎週の授業について、復習のための調べ学習や考え方を問う課題がある																
	C:応用志向																		
	D:知識の活用・創造																		
時間外学習の内容と時間の目安	準備学修	関連事項の調べ学習(7h)																	
	事後学修	参考図書を読む。授業で扱った事項に関する課題の提出(8h)																	
教科書	使用しない。授業で提示するスライドは事前にMoodleに掲載する。																		
参考書	医学の歴史(梶田昭)講談社学術文庫 2003、近代科学の源流(伊東俊太郎)中公文庫 2007 人体解剖のルネサンス(藤田尚男)平凡社 1989、解体新書(杉田玄白、酒井シヅ)講談社学術文庫 1998、人体解剖図(ベンジャミン・リフキン他)二見書房 2007、人間科学(養老孟司)筑摩書房 2002																		
成績評価の方法及び評価割合	評価方法					割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10			
	授業中のクイズ					20%	○												
	授業ごとの課題					30%		○											
	期末試験					50%		○	○										
注意事項	解剖図、写真、ビデオ等を説明に使います。常識の範囲内ですが、苦手な人は受講選択の際に注意して下さい。オンデマンド授業になる可能性があります。その際には受講方法を改めて連絡します。																		
備考	教養科目(前期)「生命観の変遷」から派生した授業なので、内容が重なる部分がありますが、話題に対する考え方や視点は異なります。特徴的な事例について、主に絵画、壁画、彫刻、標本、ビデオなどを手がかりに考察します。生物学全般の歴史や知識を系統的に学びたい人には向きません																		
リンク																			
	URL																		

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)		授業形式										
AA42G318		地域と情報(Community-based Information System)				全学共通科目 福祉・地域		オンライン(オンデマ ンド型)										
		*大分を創る科目																
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員											
選択		2	1・2・3・4	教・経・医・ 理工・福	後期	水1	氏名 藤井 弘也(理事)											
							E-mail hfujii@oita-u.ac.jp 内線 7562											
授業の概要	この講義では、市町村合併後の地域で進められている地域活性化の社会政策・制度整備としての情報化について、現状と問題点について考察し、デジタルデバイドや情報のセキュリティなどの問題点への多くの取り組みを紹介すると共に、国策として進められようとしている情報化の方針を紹介しながら、望ましい地域の情報化について考えていくことを目的としています。																	
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
目標1	地域の情報化の現状を知り、具体的問題点について考える。											○	○					
目標2	国の進めようとしている情報化の方針と地域の情報化との関連を理解する。												○	○				
目標3	学生それぞれが地域の情報化について考えることが出来る							○	○	○			○					
目標4																		
目標5																		
目標6																		
目標7																		
目標8																		
目標9																		
目標10																		
授業の内容																		
1 地域の情報化例1(総務省報告書より1例目)																		
2 地域の情報化例2(総務省報告書より2例目)																		
3 地域の情報化例3(総務省報告書より3例目)																		
4 国策と地域の情報化																		
5 デジタルデバイド1																		
6 デジタルデバイド2																		
7 ネットワークとセキュリティ																		
8 ネットワークと映像・音声1																		
9 ネットワークと映像・音声2																		
10 個人情報とセキュリティ																		
11 豊後高田市での情報提供サービスシステム1																		
12 豊後高田市での情報提供サービスシステム2																		
13 豊後高田市での情報提供サービスシステム3																		
14 地域の情報化と課題																		
15 地域と情報化事例についてのグループ討議																		
ラ イ ク ニ テ ン グ	A:知識の定着・確認				地域の情報化の事例についてグループで具体例を決め調べ討議し、結果をまとめる。				工 夫 そ の 他 の									
	B:意見の表現・交換		○															
	C:応用志向																	
	D:知識の活用・創造																	
時間外学修の内容と時間の目安	準備学修	授業で紹介した事例の文献を必要に応じて予習する(15h)。																
	事後学修	授業ごとに提出させるライティング内容を復習する(15h)																
教科書	教科書は指定しない。																	
参考書	・デジタル・ネット産業革命 小尾敏夫 PHP研究所 ・IT革命が見る見るわかる 松原聡 サンマーク出版																	
成績評価の方法及び評価割合	評価方法																	
	毎時間のライティング																	
	レポート																	
注意事項	オンデマンドで行うので、毎回の課題(ライティング)を提出すること。																	
備考																		
リンク																		
	URL																	

ナンバリング			授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)				授業形式													
AA45N121			情報科学の世界(Introduction to Information Science)				全学共通科目 自然・科学				対面													
			*大分を創る科目																					
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員																	
選択		2	1・2・3・4	教・経・医・理工・福	後期	水1	氏名 中島 誠(理工) E-mail nakasima@oita-u.ac.jp 内線 7884																	
授業の概要		我々の周りにはさまざまな情報が渦巻いている。これらの情報は、数値や文字であったり、音声や画像で表現されたりとその形態が様ではない。また、その内容も広範囲で多岐に渡っている。情報科学は情報を取り扱うときの基礎となる理論体系で、日常生活において我々が最も恩恵を受けている学問といっても過言ではない。この講義では、情報科学の基礎的な考え方を学修し、さらに、コンピュータによる情報処理についても学んでいく。																						
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)								1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
目標1		情報科学における考え方には多くの視点があることに関心をもち、それらを説明できる。													○									
目標2		世の中にあふれる情報を収集・活用する適切な手段を選択できる。													○									
目標3		情報科学に関連した技術について興味を持ち、基本的な課題や原理を説明できる。															○							
目標4		現代社会における情報科学・情報技術の様々な応用場面を把握し、説明できる。															○							
目標5																								
目標6																								
目標7																								
目標8																								
目標9																								
目標10																								
授業の内容																								
1 情報洪水に溺れないように(1)(講義ガイダンス含む): インターネットの歴史と基本技術																								
2 情報洪水に溺れないように(2): 電子図書館とサーチエンジン																								
3 情報の探し方を科学する: 情報検索に関わる種々の技術																								
4 ソフトウェアを記述する(1): ソフトウェアの特徴と設計方法																								
5 ソフトウェアを記述する(2): プログラミングへの招待																								
6 人間とコンピュータのリアルな関係(1): 知能ロボット																								
7 人間とコンピュータのリアルな関係(2): xR技術																								
8 コンピュータの中で音はどう表現されているか(1): コンピュータ上での音の表現																								
9 コンピュータの中で音はどう表現されているか(2): 音メディア処理																								
10 百聞は一見に如かず(1): コンピュータ上での画像データの表現と処理																								
11 百聞は一見に如かず(2): パターン認識の原理																								
12 安全・安心なコンピュータの作り方(1): コンピュータの構成とその設計方法																								
13 安全・安心なコンピュータの作り方(2): 信頼できるコンピュータの設計技術																								
14 計算機科学と自然科学: 数値計算, 並列計算, シミュレーション																								
15 計算機科学とデータ科学: データサイエンス, 機械学習, 人工知能																								
ラーニング目標		A:知識の定着・確認		○		トピックごとに、理解度の確認あるいは、各自の意見を問うレポート課題や小テスト等を出題する。宿題として受講生自身の情報収集による事前の下調べを科す場合もある。					工夫その他の													
時間外学習の内容と時間の目安		準備学修	レポート課題や小テスト等(各担当教員の指示)の内容により、図書館等での事前の下調べ(15h)が必要となる場合もある。																					
		事後学修	授業で学習したことを活かし、課題の完成度を高める(30h)																					
教科書		教科書は用いない。																						
参考書		適宜、参考資料を配付する。																						
成績評価の方法及び評価割合	評価方法					割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10								
	レポート課題					70%	○	○	○	○														
	小テスト					30%	○	○	○	○														
注意事項		工学部知能情報システム工学科ならびに理工学部共創理工学科知能情報システムコースの学生は履修不可。すでに全学共通科目の「コンピュータ科学入門」を修得した学生は履修不可。																						
備考		古家賢一(理工), 高見利也(理工), 大竹哲史(理工), 紙名哲生(理工), 行天啓二(理工), 池部実(理工), 賀川経夫(理工), 佐藤慶三(理工)も含わせて担当する。																						
リンク																								
		URL																						

担当教員の 実務経験の 有無	。
教員の実務 経験	中島誠（開発者），古家賢一（研究員），紙名哲生（研究員），行天啓二（システムエンジニア），佐藤慶三（システムエンジニア）
実務経験を いかした教 育内容	情報処理技術について，企業等での実際のシステム開発，情報収集，研究開発などの経験を織り交ぜながら，解説する。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)		授業形式							
		自然体験活動の理論と実践(A theory and practice to recognize nature)				全学共通科目 福祉・地域		対面							
AA42G013															
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員									
選択	2	1・2・3・4	教・経・医・理工・福	前期／後期	水1	氏名 牧野 治敏(教マ)									
						E-mail hmakino@oita-u.ac.jp 内線 7644									
授業の概要	自然認識の過程を実践的に学ぶ授業です。自然認識の深まり、広がり自然科学の理解を強固にすると同時に、獲得した知識や技能が自然への知覚を広げ深めるという相互作用を体験的に学習します。また、自分自身も自然の一部であるとの立場でSDG s を考察します。														
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)									
目標1	身のまわりの自然を深く感じ取る手法を5つ以上修得している。					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
目標2	多様な見方、考え方、感じ方を受容した応答や意思表示ができる。						○	○							
目標3	効果的な自然体験指導を理論に基づいて説明できる。					○									
目標4	SDG s のいくつかを自分自身との関わりで説明できる。							○	○	○	○				
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
授業の内容															
1	自然体験とは(授業の概要説明。直接体験と間接体験について)														
2	自然に対する既有知識の確認(初歩的な自然認識について)														
3	自然に目を向けるための活動1(身のまわりの自然に興味を持たせる)														
4	「活動1」の解説(教えるのではなく気づかせるための工夫)														
5	自然に目を向けるための活動2(五感を使った気づき)														
6	「活動2」の解説(感じ方の個人差を活用した指導法)														
7	危機管理のためのブレーンストーミングと野外活動時の危機管理について														
8	SDG s の概要と環境教育														
9	グループに分かれて、指導の実践と相互評価(その1)														
10	指導の振り返りと課題の解決(その1)														
11	グループに分かれて、指導の実践と相互評価(その2)														
12	指導の振り返りと課題の解決(その2)														
13	環境保全に関する検討会														
14	より深く自然を体験する活動(自然との一体感)														
15	この授業による認知的変容を描画により表現する活動														
ラ イ ク ニ テ ィ ン グ	A:知識の定着・確認	○	・直接に自然を体験し、その体験を言葉や絵で表現し、受講生間で共有する。					工 夫 そ の 他 の							
	B:意見の表現・交換	○	・指導者としての実践をとおして、自分の意図を外化することを体験する。												
	C:応用志向														
	D:知識の活用・創造														
時間外学修の内容と時間の目安	準備学修	教科書の必要箇所を読み、シェアリングネイチャーの理念を理解する。(8h)													
	事後学修	実践したアクティビティの要点を、教科書から抽出しまとめる。自然との一体感を得るためのエクササイズをする。実践実習のための「指導計画書」を作成し、予行演習をする。(8h)													
教科書	『シェアリングネイチャー～自然のよこびをわかちあおう～』ジョセフ・コーネル著 日本シェアリングネイチャー協会発行(2012年) 2000円(税別)														
参考書	Joseph Bharat Cornell 著「The SKY and EARTH Touched Me」「DEEP NATURE PLAY」「FLOW LEARNING」 いずれも Crystal Clarity Publishers														
成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10		
	ミニッツペーパー		30%	○	○	○									
	課題提出		30%			○	○								
	実技		20%	○	○	○									
	実践計画書の提出		20%			○									
・実習については、回を改めた次の授業で振り返りをするので、実習1回の欠席は授業2回分の不参加に相当します。注意してください。															
注意事項	受講生を20人までに制限します。パンダナと敷物は必須です。各自で準備してください。雨中での活動がしやすいように、雨合羽などの雨具が必須です(傘は不適)。暑さや寒さへの対策も必要です。実習のグループ編成に間に合わない場合は遅刻ではなく欠席とします。														
備考	公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会公認の「ネイチャーゲームリーダー」の資格が取得できる授業です。全課程履修、及び検定試験の合格が条件です。(登録料と1年目の年会費が別途必要ですが、それ以降の在学中の年会費は免除されます)														
リンク	ネイチャーゲームのビデオ(日本シェアリングネイチャー協会ホームページ)														
	URL	https://www.naturegame.or.jp/													

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)		授業形式									
AA42G116		学習意欲の心理学(Psychology of Motivation and Learning)				全学共通科目 福祉・地域		オンライン（オンデマ ンド型）									
		*大分を創る科目															
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員											
選択	2	1・2・3・4	教・経・医・ 理工・福	後期	水1	氏名 鈴木 雄清（IR） E-mail suzuki@oita-u.ac.jp 内線 7069											
授業の概要	知識社会の到来に伴い，生涯を通じて主体的かつ継続的に学習することが求められるようになっている。そのためには，自らの学習意欲を高められることが重要である。学習意欲に関する心理学理論は多数ある。それらの理論のいくつかを取り上げて紹介し，自分にあった方策を活用して学習意欲を高めることができるようになることをめざす。																
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標1	学習意欲に係わる心理学の理論を説明できる。						○										
目標2	学習意欲の問題に対して，解決案を示すことができる。							○									
目標3	学習者として，意欲を高めるための方策を選択し，活用できる。										○						
目標4																	
目標5																	
目標6																	
目標7																	
目標8																	
目標9																	
目標10																	
授業の内容																	
1	オリエンテーション，欲求段階説とERG理論																
2	協同学習の要素・アイスブレイク																
3	学習スタイル																
4	学習意欲と報酬																
5	自己効力感・ビッグマリオン効果																
6	マインドセット																
7	学習性無力感と楽観主義																
8	フロー経験																
9	集中力を高める																
10	マインドフルネス																
11	学習と運動																
12	アドラー心理学																
13	ライフスタイルと学習																
14	自己調整学習・教育経験の振り返り																
15	ARCS動機づけモデルによる分析																
ラーニング目標	A:知識の定着・確認	○	小テスト、演習、省察ミニッツペーパー課題、フォーラムでの意見交換				工夫その他の	オンデマンド型（非同期型）遠隔授業									
	B:意見の表現・交換	○															
	C:応用志向																
	D:知識の活用・創造																
時間外学習の内容と時間の目安	準備学修	必要に応じて配付資料等を用いて予習する。これまで受けた教育での動機づけについて振り返る(1h)。															
	事後学修	小テストや資料等を用いて復習する（10h）。課題の完成度を高める(20h)。学習の動機づけ方策を実践する(14h)。															
教科書	教科書は指定しない。 必要に応じて，資料等を提示する。																
参考書	John M. Keller(原著)，鈴木 克明（翻訳）『学習意欲をデザインする―ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン』，北大路書房，2010年，ISBN：978-4762827211																
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10					
	小テスト	10%	○														
	タスク・ミニッツペーパー	70%	○	○	○												
	最終課題	20%	○	○	○												
	すべての小テストおよび最終課題の合格を単位取得の条件とする。																
注意事項																	
備考																	
リンク																	
	URL																

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)		授業形式											
		電気の世界 (Introduction to Electrical Engineering)				全学共通科目 自然・科学		対面											
AA45N019																			
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員												
選択		2	1・2・3・4	教・経・医・理工・福	後期	水2	氏名 戸高 孝(理工) E-mail todaka@oita-u.ac.jp 内線 7823												
授業の概要	この講義では、工学系の基礎的な勉強をしていない学生にも対応して、最近の話題を含めて、やさしく電気の世界を学ぶ。導入では、電気の基本的な考え方や法則を理解し、その応用について学ぶ。また、最新の電気技術のいくつかを取り上げて解説する。課題では、電気に関連した新しい技術や話題を調べて、その基本的な考え方を学ぶ。																		
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
目標1	電気に関する基本的な用語を理解し、説明できるようになる						○												
目標2	電気に関連した現象とそれを支配する法則を説明できる								○										
目標3	基礎的な電気回路の計算ができる						○												
目標4	電気磁気現象を応用した工学技術を説明できる								○										
目標5	電気の応用技術や新しい技術を調べて説明できるようになる								○				○						
目標6																			
目標7																			
目標8																			
目標9																			
目標10																			
授業の内容																			
1		ガイダンス：授業の進め方と講義内容の説明，電気の見えと歴史																	
2		電子の正体																	
3		個体中の電気伝導																	
4		導体とその応用																	
5		超伝導とその応用																	
6		半導体の基礎																	
7		半導体の応用																	
8		誘電体とその応用																	
9		磁性体の基礎																	
10		磁性体の応用																	
11		電磁誘導とその応用																	
12		電磁波とその応用																	
13		電気回路の基礎																	
14		電気機器の基礎																	
15		電気機器の応用，講義のまとめ																	
ラーニングポイント	A:知識の定着・確認	○	毎回，講義内容の理解を深めるため，小テストを行う。						工夫その他の	映像資料により，理解を深める。									
	B:意見の表現・交換		課題を与え，調査し発表させる。																
	C:応用志向	○	講義中，質問することにより理解を深めさせる。																
	D:知識の活用・創造	○																	
時間外学習の内容と時間の目安	準備学修	配布資料を予習する（15h）。																	
	事後学修	講義の内容を整理し，理解を深める（15h）。小テストや配布資料を用いて復習する（10h）。																	
教科書		教科書は用いない。 講義資料を配布する。																	
参考書		講義の中で必要があれば，参考書等を紹介する。																	
成績評価の方法及び評価割合	評価方法				割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10				
	小テスト				20%	○	○	○	○										
	中間課題				20%				○	○									
	期末試験				60%	○	○	○	○										
注意事項		新型コロナウイルスの影響によっては、オンライン講義とし、期末試験はレポートとなる場合がある。																	
備考																			
リンク																			
		URL																	

ナンバリング			授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)		授業形式										
AA45N122			くらしの化学(Chemistry in Daily Life)				全学共通科目 自然・科学		対面										
			*大分を創る科目																
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員												
選択		2	1・2・3・4	教・経・医・理工・福	後期	水2	氏名 氏家 誠司(内線 7903), 衣本 太郎(内線 7905)(理工) E-mail seujiie@oita-u.ac.jp(氏家), kinumoto@oita-u.ac.jp(衣本) 内線												
授業の概要		身の回りで利用されている化学物質・材料および化学製品について理解するとともに、その機能および性能について学ぶ。具体的には、界面活性剤、プラスチック、ゴム、繊維、染料、化粧品、セラミックス、生体材料および光学材料などについて身近な製品や実験などを通して理解を深める。さらに暮らしに密接する重要な危害物質として、放射性物質をとりあげ、その発見と関連する放射線の影響、種類、特性、単位を理解し、その人体に及ぼす影響と安全利用について理解を深めるとともに、将来のエネルギー構想について概観する。以上により、日々の暮らしの中に如何に「化学」が関係しているかを理解する。																	
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標1		身近な化学材料や化学製品を知る。							○										
目標2		身近な化学材料や化学製品の特長、役割および問題点を理解する。							○	○	○	○	○						
目標3		身近な化学材料や化学製品の未来について考える。							○	○	○	○	○						
目標4		日常生活環境に潜在する様々な放射性物質由来の「放射線」について理解する。							○	○			○						
目標5																			
目標6																			
目標7																			
目標8																			
目標9																			
目標10																			
授業の内容																			
1		くらしにおける化学のかかわり																	
2		身の回りにおける化学製品の概要																	
3		石油化学工業と製品の概要																	
4		化学物質・材料と製品の概要																	
5		染料の特徴と応用範囲																	
6		プラスチック製品の特徴と応用範囲																	
7		繊維製品の特長と応用範囲																	
8		界面の科学と応用製品(石鹸、洗剤、化粧品)																	
9		放射性物質と原子力発電																	
10		次世代エネルギーと電池の化学																	
11		無機物・炭素材料について																	
12		くらしに関連する金属																	
13		くらしに関連するセラミックス																	
14		大気環境の化学																	
15		水に関する化学と講義のまとめ																	
ラ		A:知識の定着・確認		○		講義の内容に合わせて下記のいずれかをそれぞれの回で行う。					工夫その他の		身近にあり、人の営みの中で必要であり、重要なものであるが、その扱い方には注意が必要であることを理解し、日ごろから意識できるようにする。						
イ		B:意見の表現・交換		○		1. その回のテーマに対する自分の考えを書いてもらう。													
ニ		C:応用志向		○		2. 講義を聴いて理解していなければ解けない問題に取り組んでもらう。													
テ		D:知識の活用・創造		○															
時間外学習の内容と時間の目安		準備学習	日常的に利用している化学製品やエネルギーに関する現状や課題を調べ、学習しておく(10h)。																
		事後学習	授業中に得た知識や意見交換で得た情報をもとに自分の考えをまとめレポートにまとめる(10h)。																
教科書		教養としての化学入門 化学同人 ISBN978-4-7598-2078-2 必要に応じて資料を配布する。																	
参考書		授業中に適宜紹介する。																	
成績評価の方法及び評価割合	評価方法					割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10			
	意見交換					30%	○		○	○									
	小テスト					20%		○											
	アイディア創出					20%		○	○	○									
	最終課題					30%			○	○									
評価については、対面かmoodleのどちらかで行う。																			
注意事項		理工学部応用化学コース、工学部応用化学科の学生は受講不可。																	
備考		演示実験等を行うため受講可能な人数は60名程度。教員以外の実務経験者(工芸専門家など)が講義・指導に参加する。																	
リンク																			
		URL																	

教員以外で指導に関わる実務経験者の有無	。
教員以外の実務経験者	天然素材の工芸専門家
実務経験をいかした教育内容	【工芸専門家】県産品である竹を中心に科学にもとづいた造形について概説する。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式									
AA42G211		インストラクショナルデザイン入門(Instructional Design Fundamentals)					全学共通科目 福祉・地域		対面									
		*大分を創る科目																
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員											
選択		2	1・2・3・4	教・経・医・理工・福	後期	水2	氏名 鈴木 雄清 (IR)											
							E-mail suzuki@oita-u.ac.jp 内線 7069											
授業の概要		企業や医療現場における教育，高等教育などで幅広く用いられているインストラクショナルデザインの基礎を，実際の教材作成体験を通じて学ぶ。独学教材の設計，作成，改善を通じて，教育を効果的に，効率よく，魅力的にする方法を実現できるようになることをめざす。																
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
目標1 明確な目標の設定やテストの作成，教授方略を用いた教材の設計ができる。											○							
目標2 インストラクショナルデザインの基礎に従って，独学を支援するための教材を作成できる。											○							
目標3 形成的評価を実施し，よりよい教材にするために改善策を提案できる。											○							
目標4																		
目標5																		
目標6																		
目標7																		
目標8																		
目標9																		
目標10																		
授業の内容																		
1 【ブロック1】オリエンテーション，独学を支援する教材																		
2 教材をイメージする，教材作りをイメージする																		
3 教材の責任範囲を明らかにする，テストを作成する																		
4 教材企画書（初版）の作成																		
5 教材企画書の相互評価																		
6 教材企画書（改訂第2版）の作成〔課題1〕																		
7 【ブロック2】相互評価・改訂版の作成																		
8 教材パッケージを作成する																		
9 教材企画書（改訂第3版）の作成																		
10 教材パッケージの作成																		
11 【ブロック3】形成的評価を実施する，教材を改善する																		
12 教材パッケージの相互評価																		
13 教材パッケージの改訂版作成〔課題2〕																		
14 形成的評価の実施																		
15 総まとめと最終課題〔課題3〕																		
ラック ニ テ イ グ ブ		A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造		○ ○ ○		小テスト，フォーラムでの相互コメント，現実的な課題に基づく学習成果物の作成，成果物の相互レビュー，チェックリスト・ループリックによる自己評価		工夫 その 他の		LMS (Moodle) の活用，タスクは各自のペースで実施								
時間外学習の内容と時間の目安		準備 学修 事後 学修		教科書を必要に応じて読む(5h)。														
				授業で学習したことを活かし，課題の完成度を高める(35h)。小テストや教科書・参考文献を用いて復習する(2h)。形成的評価を実施する(3h)。														
教科書		鈴木克明 『教材設計マニュアル―独学を支援するために』 北大路書房，2002年，ISBN9784762822445〔2,200円+税〕																
参考書		R.M.ガニエ・W.W.ウェイジャー・K.C.ゴラス・J.M.ケラー（著），鈴木克明・岩崎信（監訳）『インストラクショナルデザインの原理』 北大路書房，2007年，ISBN9784762825736																
成績評価の方法及び評価割合		評価方法					割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10	
		小テスト・フォーラム投稿課題					20%	○	○	○								
		教材企画書〔課題1〕					20%	○										
		教材パッケージ〔課題2〕					40%		○									
		最終課題〔課題3〕					20%			○								
		すべての小テストおよびすべての課題の合格を単位取得の条件とする。																
注意事項																		
備考																		
リンク																		
		URL																

ナンバリング			授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)				授業形式										
AA44S217			企業ファイナンス入門(Essentials of Corporate Finance)				全学共通科目 社会・経済				対面										
			*大分を創る科目																		
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員														
選択		2	1・2・3・4	経・理工	後期	木2	氏名 鶴崎 清貴(経)														
							E-mail kuzaki@oita-u.ac.jp 内線 7687														
授業の概要	今日、日本やアメリカをはじめとする先進諸国の経済は、グローバル化を続けている。その中で、わが国の企業は、どのような行動、特に財務戦略を執ろうとしているのだろうか。 本講義では、この企業の財務行動を中心に企業の活動を講義する。また必要な会計知識や統計学も講義する。 講義に際しては、簿記・会計学や統計学の知識がない学生にも十分理解できるようにする。																				
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標1	株式会社の財務活動の概要を理解できる。										○										
目標2	ファイナンス論の基礎が習得できる。										○										
目標3	社会で生じている経済及び経営問題に対する解決アプローチを考察できる												○		○						
目標4																					
目標5																					
目標6																					
目標7																					
目標8																					
目標9																					
目標10																					
授業の内容																					
1	イントロダクション																				
2	企業経営と企業ファイナンス																				
3	投資に関する理論																				
4	証券投資に関する理論(1)																				
5	証券投資に関する理論(2)																				
6	企業価値評価(1)																				
7	企業価値評価(2)																				
8	企業の最適資本構成と配当政策																				
9	資本市場に関する理論(1)																				
10	資本市場に関する理論(2)																				
11	デリバティブの理論と実践的知識(1)																				
12	デリバティブの理論と実践的知識(2)																				
13	M&A(1)																				
14	M&A(2)																				
15	コーポレート・ガバナンス																				
ラ	A:知識の定着・確認		○	講義中に問題を解き、知識の確認を行っている。また講義中に時事経済・経営問題を議論している。						工 夫 の 他 の											
イ	B:意見の表現・交換		○																		
ク	C:応用志向																				
ニ	D:知識の活用・創造		○																		
テ																					
ン																					
グ																					
ブ																					
時間外学習の内容と時間の目安	準備学修	新聞等で経済・経営問題を見ておく。																			
	事後学修																				
教科書	鶴崎清貴(2022)『Rによるコーポレートファイナンス入門』坂本恒夫編著(2017)『テキスト 現代企業論』同文館出版。Powerpointを利用し、資料を配布する。																				
参考書	市村昭三編(1995)『財務管理』創成社。																				
成績評価の方法及び評価割合	評価方法					割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10					
	講義中の発言					30%	○	○	○												
	レポート					20%	○	○	○												
	最終レポート					50%	○	○	○												
注意事項																					
備考																					
リンク																					
	URL																				

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の实務 経験	公認会計士事務所顧問，株式会社非常勤監査役

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)		授業形式											
AA41G116		こことーくでキャリアを拓く(KokoTalk: Collaborative Career Development Seminar)				全学共通科目 導入・転換		対面											
		*大分を創る科目																	
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員												
選択		2	1・2・3・4	教・経・福 理工・医は 注意事項を参 照	後期	金2	氏名 宮町 良広(経), 徳丸 一彦(経) E-mail ymiya@oita-u.ac.jp (宮町), tokumaru-kazu@oita-u.ac.jp(徳丸) 内線 7684(宮町),												
授業の概要																			
こことーくとは、人のココロに灯をともし、ココでの話という意味です。こことーくの源流は、高校生向けのキャリア教育で全国的に注目されるNPO団体カタリバ(本部東京)にあります。2001年の設立以降、全国の約1300校、約22万人の高校生に対しキャリア学習プログラム「カタリ場」を行っており、活動の主な担い手は大学生です。本授業では、NPO及び九州キャリア教育研究会と連携し、こことーくという名前で大分大学版カタリ場を実施します。受講生は教室で十分な学習を行い、スタッフとして高校訪問します。高校の教育現場に飛び込むことで、自分自身のキャリアを拓く力を養成します。【こんな方にお勧めです】「高校生の時に進路についてもっと考えておきたかった」「大学でやりたいことが見つからない」「深い話が出る友達がいらない」「自分に自信がない。そんな自分を変えたい」「就活をやりぬく力を身につけたい」																			
具体的な到達目標																			
DP等の対応(別表参照)																			
12345678910																			
目標1		自らの高校時代の体験を振り返り、それを高校生との対話に活かすコミュニケーションができる。						○											
目標2		ココトークのスタッフと協力して、高校訪問の企画・準備・運営やプレゼンテーションができる。							○		○								
目標3		自分の進路体験を内省し、将来のキャリアを主体的に開拓できる基礎力を身につけている。										○							
目標4																			
目標5																			
目標6																			
目標7																			
目標8																			
目標9																			
目標10																			
授業の内容																			
1		イントロダクション																	
2		こことーくのスタッフになるための学習・研修																	
3		こことーくのスタッフになるための学習・研修																	
4		こことーくのスタッフになるための学習・研修																	
5		こことーくのスタッフになるための学習・研修																	
6		こことーく前日研修																	
7		高校での第1回こことーく実施(2回分をまとめて土曜日などに実施, 大学バス等で移動)																	
8		高校での第1回こことーく実施(2回分をまとめて土曜日などに実施, 大学バス等で移動)																	
9		振り返り、改善点の抽出																	
10		振り返り、改善点の抽出																	
11		こことーく前日研修																	
12		高校での第2回こことーく実施(2回分をまとめて土曜日などに実施, 大学バス等で移動)																	
13		高校での第2回こことーく実施(2回分をまとめて土曜日などに実施, 大学バス等で移動)																	
14		振り返り																	
15		自分のキャリア計画づくり																	
ラ イ ク ニ テ ン イ グ ブ		A:知識の定着・確認		B:意見の表現・交換		C:応用志向		D:知識の活用・創造		こことーく、グループやペアでの対話ワーク、想定した複数の高校生の役割を演じるロールプレイ、質疑応答と全体共有、現地実習		工夫 その他		訪問高校の特性分析、企画立案、授業の準備・実施					
時間外学修の内容と時間の目安		準備学修		「人生グラフ」の作成(2h)。「先輩の話」の作成(10h)。こことーく企画の作成(20h)。															
		事後学修		レポート作成(3h)。報告書作成(5h)。															
教科書		特になし。																	
参考書		『「カタリバ」という授業』上阪 徹、英治出版、2010年、1,575円																	
成績評価の方法及び評価割合		評価方法				割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10			
		課題作業への取組状況				30%	○	○											
		こことーくでの内容・態度				30%		○	○										
		レポート(2課題)				40%			○										
注意事項		理工・医学部の学生でも受講できる場合があります(希望者は担当教員に連絡して下さい)。履修希望者が定員(50名程度)を超えた場合は、事前説明会(7月に実施予定)の参加者を優先することがあります。こことーくは土曜日などに実施し、その分の通常授業を休講とする予定です。																	
備考		過年度の受講生が自主的に授業を応援してくれます。【昨年度の受講生の声】「大学に来て一番やる気が出た」「単位が出なくてももう一度この授業をとりたい」「高校生と向き合うことで自分自身が成長した」「人見知りの部分が減って、自信がついた」「全力で取り組むことの素晴らしさを感じた」																	
リンク		認定NPO法人カタリバ URL https://www.katariba.or.jp																	

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)		授業形式									
		多文化共生論(Multiculturalism and the Politics of Identity)				地域システム学科 地域システム学科		対面									
K343R401																	
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員											
選択	2	3,4	経	後学期	木2	氏名 久保田 亮											
						E-mail yuralria@gmail.com 内線 7730											
授業の概要	異文化間コミュニケーションや多文化共生の相手として想定されている「異質な他者」という存在は、いかなる点において「わたしたち」と異なるのでしょうか。本講義では、人種、国籍、民族といったヒトを区分する概念について注目するとともに、そうした区分が社会システムの中にどのように埋め込まれているのかについて、具体的な事例に基づき学びます。																
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
目標1	講義で学んだ概念、理論、事例を正確に説明できる。							○									
目標2	構築主義的な視点に基づき、ヒトの区別について議論できるようになる。							○									
目標3	文化が他者の認知や評価に与える影響について理解する。										○						
目標4																	
目標5																	
目標6																	
目標7																	
目標8																	
目標9																	
目標10																	
授業の内容																	
1	イントロダクション																
2	アイスブレイク・グループディスカッションの技法																
3	文化の働き																
4	人種という区別(1)																
5	人種という区別(2)																
6	小括・グループディスカッション																
7	国籍に基づく区別(1)																
8	国籍に基づく区別(2)																
9	小括・グループディスカッション																
10	民族・エスニシティ(1)																
11	民族・エスニシティ(2)																
12	小括・グループディスカッション																
13	多文化社会・日本(1)																
14	多文化社会・日本(2)																
15	まとめ・グループディスカッション																
ラ イ ク ニ テ ィ ン グ	A:知識の定着・確認		○	・ミニッツ・ペーパーの作成を通して講義内容をより深く理解する機会を提供します。				工 夫 そ の 他 の									
	B:意見の表現・交換		○	・グループディスカッションを通してコミュニケーションを実践的に学習します。													
	C:応用志向																
	D:知識の活用・創造		○														
時間外学習の内容と時間の目安		準備学修	配布資料、参考文献に対して目を通し、予習する(15h)。														
		事後学修	ミニッツペーパーの評価、コメントに目を通し、授業での学習成果についての確認作業を行うとともに、配布資料、ノート、参考文献を用いて復習する(15h)														
教科書		教科書は使用しません。ただし必要に応じて資料を配布することはあります。															
参考書		授業内において必要に応じて紹介します。															
成績評価の方法及び評価割合	評価方法					割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10	
	ミニッツ・ペーパー					40%	○										
	課題					20%		○									
	期末試験					40%	○	○	○								
注意事項		遅刻、私語等の授業進行を妨げる行為があった場合、退出を命じることがあります。授業スケジュールは変更する場合があるため、掲示の確認を怠らないください。															
備考		初回授業で成績評価方法や授業進行について詳しく説明します。必ず出席してください。上記に掲げた授業内容は状況に応じて変更する場合があります。															
リンク																	
		URL															

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)		授業形式										
		金融イノベーション論(Financial Innovation)				社会イノベーション学科 社会イノベーション学科		対面										
K442S404																		
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員												
選択	2	2,3,4	経済	後期	木3	氏名 鶴崎 清貴												
						E-mail kuzaki@oita-u.ac.jp 内線 7687												
授業の概要 金融イノベーションとは、IoTやビッグデータそして人工知能といった技術革新が金融と産業のあり方を大きく変え、これまでは考えられなかったような新たな金融サービスです。金融イノベーションは、プロダクト・イノベーション、プロセス・イノベーション、ソーシャル・イノベーション、そしてセキュリティ・イノベーションの4つのイノベーションが総合し、相乗効果を生むことにより、創出されます。金融イノベーションは、金融業からのみ生まれるとは限らず、他の産業からも生まれる可能性があり概してファイナンスを解説します。																		
具体的な到達目標																		
目標1	金融イノベーションの専門用語を理解することができる。						○											
目標2	金融イノベーションの基礎を習得し、社会で生じている経済諸問題を理解できる。									○	○	○						
目標3	企業に関わる諸問題を解決する方法を習得でき、資格取得に役立つ。								○									
目標4	企業の社会的責任の重要性を理解できる。									○								
目標5	Rの基礎を学習できる。						○											
目標6																		
目標7																		
目標8																		
目標9																		
目標10																		
授業の内容																		
1	イントロダクション																	
2	金融イノベーションの意義																	
3	銀行業における金融イノベーション																	
4	保険業における金融イノベーション																	
5	Rの導入と基本的操作																	
6	収益率と回帰分析																	
7	イールドカーブと主成分分析																	
8	ポートフォリオ理論																	
9	資本資産評価モデル（CAPM）																	
10	金利スワップ																	
11	プライシングとツリーモデル																	
12	Black&Scholes 公式																	
13	モンテカルロシミュレーション																	
14	まとめ																	
15	予備日																	
ラーニング 目標	A:知識の定着・確認		○	講義中に問題を解き、知識の確認を行っています。また講義中に時事経済・経営問題を議論します。					工夫 その他 の									
	B:意見の表現・交換		○	ビッグデータを分析できる高度な統計ソフトであるRの取得に努めます														
	C:応用志向		○															
	D:知識の活用・創造		○															
時間外学習 の内容と時間の 目安	準備 学修	日経新聞を読むように勧めています。																
	事後 学修	レポートや課題を出しています。																
教科書	大崎秀一・吉川大介（2013）『ファイナンスのためのRプログラミング』共立出版。																	
参考書	Welch, Ivo, 2011. Corporate finance an introduction 2nd Editon (Prentice Hall). 市村昭三編（1995）『財務管理論』創成社出版年。 秋山裕（2018）『Rによる計量経済』オーム社。																	
成績 評価 の 方法 及び 評価 割合	評価方法				割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10			
	講義中の発言				20%													
	レポート				30%													
	期末テスト				50%													
注意事項	銀行・証券業界等財務関連職種希望者および各種国家試験(証券アナリスト・公認会計士・税理士等)を受験希望の者の受講を歓迎します。																	
備考	パワーポイントを用い講義を進め、講義ごとに資料を配付します。																	
リンク																		
	URL																	

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の实務 経験	公認会計士事務所顧問，株式会社非常勤監査役

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式										
K442S404		金融イノベーション論(Financial Innovation)					経営システム学科 経営システム学科		対面										
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員													
選択	2	2,3,4	経済	後期	木3	氏名 鶴崎 清貴 E-mail kuzaki@oita-u.ac.jp 内線 7687													
授業の概要 金融イノベーションとは、IoTやビッグデータそして人工知能といった技術革新が金融と産業のあり方を大きく変え、これまでは考えられなかったような新たな金融サービスです。金融イノベーションは、プロダクト・イノベーション、プロセス・イノベーション、ソーシャル・イノベーション、そしてセキュリティ・イノベーションの4つのイノベーションが総合し、相乗効果を生むことにより、創出されます。金融イノベーションは、金融業からのみ生まれるとは限らず、他の産業からも生まれる可能性があり、産業の垣根を越える、あるいは国境を超える競争となります。本講義では、金融イノベーションの意義と事例を明らかにするとともに、ビッグデータを解析できるRを用いてファイナンスを解説します。																			
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標1	金融イノベーションの専門用語を理解することができる。								○										
目標2	金融イノベーションの基礎を習得し、社会で生じている経済諸問題を理解できる。											○	○	○					
目標3	企業に関わる諸問題を解決する方法を習得でき、資格取得に役立つ。										○								
目標4	企業の社会的責任の重要性を理解できる。											○							
目標5	Rの基礎を学習できる。								○										
目標6																			
目標7																			
目標8																			
目標9																			
目標10																			
授業の内容																			
1 イントロダクション																			
2 金融イノベーションの意義																			
3 銀行業における金融イノベーション																			
4 保険業における金融イノベーション																			
5 Rの導入と基本的操作																			
6 収益率と回帰分析																			
7 イールドカーブと主成分分析																			
8 ポートフォリオ理論																			
9 資本資産評価モデル(CAPM)																			
10 金利スワップ																			
11 プライシングとツリーモデル																			
12 Black&Scholes 公式																			
13 モンテカルロシミュレーション																			
14 まとめ																			
15 予備日																			
ラーニング チェック ポイント グループ	A:知識の定着・確認		○	講義中に問題を解き、知識の確認を行っています。また講義中に時事経済・経営問題を議論します。					工夫 その 他の										
	B:意見の表現・交換		○	ビッグデータを分析できる高度な統計ソフトであるRの取得に努めます															
	C:応用志向		○																
	D:知識の活用・創造		○																
時間外学修 の内容と時 間の目安	準備 学修	日経新聞を読むように勤めています。																	
	事後 学修	レポートや課題を出しています。																	
教科書	大崎秀一・吉川大介(2013)『ファイナンスのためのRプログラミング』共立出版。																		
参考書	Welch, Ivo, 2011. Corporate finance an introduction 2nd Editon (Prentice Hall). 市村昭三編(1995)『財務管理論』創成社出版年。 秋山裕(2018)『Rによる計量経済』オーム社。																		
成績 評価 の 方 法 及 び 評 価 割 合	評価方法						割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10		
	講義中の発言						20%												
	レポート						30%												
	期末テスト						50%												
注意事項												銀行・証券業界等財務関連職種希望者および各種国家試験(証券アナリスト・公認会計士・税理士等)を受験希望の者の受講を歓迎します。							
備考												パワーポイントを用い講義を進め、講義ごとに資料を配付します。							
リンク																			
	URL																		

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の实務 経験	公認会計士事務所顧問，株式会社非常勤監査役

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式									
K443S403		ベンチャー実践論(Venture Practical Theory)					経営システム学科 経営システム学科		対面									
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員											
選択		2	3,4	経済	後期	木3	氏名 渡邊 博子											
							E-mail watanabe-hr@oita-u.ac.jp 内線 7702											
授業概要		本授業では、ベンチャー企業の定義や概念、関連するイノベーションやアントレプレナーシップ、取り巻く経済・産業・社会とその構造変化などについてさらに理解を深めていきます。また、ベンチャー起業のビジネス的側面として、アイデアの育成、収益の出し方、販売促進や市場開拓、差別化や事業の強みなどを再認識したうえで、実際にビジネスプランを作成してもらいます。アイデアやテーマの選定、ビジネスモデルの構築とその事業可能性などについて考察しながら、様々な知識を用いてビジネスプランを考え、他者に説明する機会を設定します。また、ビジネスプランの実践として、実際に起業したり、アントレプレナーシップを身につけイノベーションに取り組んだり、本授業を自身のキャリアの一環として捉えてもらえるようにも実施していきたいと思います。																
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標1		イノベーションやアントレプレナーシップなどのベンチャーに関わる概念を確認し、社会と関連づける。																
目標2		ベンチャー起業のビジネス的側面を把握する。																
目標3		ビジネスプランの作成を通じて起業やベンチャーを考える。																
目標4		作成したビジネスプランを他者に説明する。																
目標5		場合によっては、作成したビジネスプランを実践する。																
目標6																		
目標7																		
目標8																		
目標9																		
目標10																		
授業の内容																		
1		イノベーションとアントレプレナーシップ、現代社会における起業																
2		ベンチャー起業のビジネス的側面(1)																
3		ベンチャー起業のビジネス的側面(2)																
4		ベンチャーの成長と多様なスタイル																
5		ビジネスプランの必要性和実際																
6		アイデアの育成やテーマの選定(1)																
7		アイデアの育成やテーマの選定(2)																
8		ビジネスモデルの構築と事業としての設立可能性(1)																
9		ビジネスモデルの構築と事業としての設立可能性(2)																
10		ビジネスプランの作成(1)																
11		ビジネスプランの作成(2)																
12		ビジネスプランの作成(3)																
13		作成したビジネスプランの発表(1)																
14		作成したビジネスプランの発表(2)																
15		講義のまとめ、ベンチャーや起業などのこれからのあり方																
ラーニング ポイント グループ		A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造	ディスカッション、グループワーク、個人ワーク、ビジネスプランの作成、プレゼンテーション、事例研究など。				工夫 その 他の	各テーマに関連した映像や新聞・雑誌記事などの利用。										
時間外学習 の内容と時間 の目安		準備 学修 事後 学修	各テーマに関する文献、関連する最新の新聞・雑誌記事、インターネット情報などの検索と学修(30時間)															
			各テーマに関する学習の振り返りと理解(15時間)															
教科書		教科書は使用しません。必要に応じて関連資料等を配布します。																
参考書		・田所雅之『起業の科学-スタートアップサイエンス-』日経BP社、2017年。 ・松重和美監修・三枝省三・竹本拓治編著『アントレプレナーシップ教科書』中央経済社、2016年。 ・川上智子・徳常泰之・長谷川伸編著『実践ビジネスプラン-事業創造の基礎力を鍛える-第2版』中央経済社、2015年。																
成績 評価 の 方法 及び 評価 割合	評価方法					割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10		
	期末試験結果					70%												
	授業参加姿勢(課題対応など)					30%												
	上記のことをもとに総合的に評価します。																	
注意事項		自主的・主体的な態度で授業に参加してください。																
備考		前期開講科目の「ベンチャー起業論」を受講していると取り組みやすいです。																
リンク																		
		URL																

担当教員の 実務経験の有無	。
教員の 実務経験	シンクタンク研究員等
教員以外で 指導に関わ る実務経験 者の有無	。
教員以外の 指導に関わ る実務経験 者	企業経営、金融機関、行政等に関わる方々
実務経験を いかした教 育内容	産業分析や関連する資料収集の仕方などの説明。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式									
K443S403		ベンチャー実践論(Venture Practical Theory)					社会イノベーション学科 社会イノベーション学科		対面									
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員											
選択		2	3,4	経済	後期	木3	氏名 渡邊 博子											
							E-mail watanabe-hr@oita-u.ac.jp 内線 7702											
授業概要		本授業では、ベンチャー企業の定義や概念、関連するイノベーションやアントレプレナーシップ、取り巻く経済・産業・社会とその構造変化などについてさらに理解を深めていきます。また、ベンチャー起業のビジネスの側面として、アイデアの育成、収益の出し方、販売促進や市場開拓、差別化や事業の強みなどを再認識したうえで、実際にビジネスプランを作成してもらいます。アイデアやテーマの選定、ビジネスモデルの構築とその事業可能性などについて考察しながら、様々な知識を用いてビジネスプランを考え、他者に説明する機会を設定します。また、ビジネスプランの実践として、実際に起業したり、アントレプレナーシップを身につけイノベーションに取り組んだり、本授業を自身のキャリアの一環として捉えてもらえるようにも実施していきたいと思います。																
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標1		イノベーションやアントレプレナーシップなどのベンチャーに関わる概念を確認し、社会と関連づける。																
目標2		ベンチャー起業のビジネスの側面を把握する。																
目標3		ビジネスプランの作成を通じて起業やベンチャーを考える。																
目標4		作成したビジネスプランを他者に説明する。																
目標5		場合によっては、作成したビジネスプランを実践する。																
目標6																		
目標7																		
目標8																		
目標9																		
目標10																		
授業の内容																		
1		イノベーションとアントレプレナーシップ、現代社会における起業																
2		ベンチャー起業のビジネス的側面(1)																
3		ベンチャー起業のビジネス的側面(2)																
4		ベンチャーの成長と多様なスタイル																
5		ビジネスプランの必要性和実際																
6		アイデアの育成やテーマの選定(1)																
7		アイデアの育成やテーマの選定(2)																
8		ビジネスモデルの構築と事業としての設立可能性(1)																
9		ビジネスモデルの構築と事業としての設立可能性(2)																
10		ビジネスプランの作成(1)																
11		ビジネスプランの作成(2)																
12		ビジネスプランの作成(3)																
13		作成したビジネスプランの発表(1)																
14		作成したビジネスプランの発表(2)																
15		講義のまとめ、ベンチャーや起業などのこれからのあり方																
ラーニング ポイント グループ	A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造	ディスカッション、グループワーク、個人ワーク、ビジネスプランの作成、プレゼンテーション、事例研究など。					工夫 その 他の	各テーマに関連した映像や新聞・雑誌記事などの利用。										
時間外学習 の内容と時間 の目安	準備 学修	各テーマに関する文献、関連する最新の新聞・雑誌記事、インターネット情報などの検索と学修(30時間)																
	事後 学修	各テーマに関する学習の振り返りと理解(15時間)																
教科書	教科書は使用しません。必要に応じて関連資料等を配布します。																	
参考書	・田所雅之『起業の科学-スタートアップサイエンス-』日経BP社、2017年。 ・松重和美監修・三枝省三・竹本拓治編著『アントレプレナーシップ教科書』中央経済社、2016年。 ・川上智子・徳常泰之・長谷川伸編著『実践ビジネスプラン-事業創造の基礎力を鍛える-第2版』中央経済社、2015年。																	
成績評価 の方法 及び 評価 割合	評価方法						割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10	
	期末試験結果						70%											
	授業参加姿勢(課題対応など)						30%											
上記のことをもとに総合的に評価します。																		
注意事項	自主的・主体的な態度で授業に参加してください。																	
備考	前期開講科目の「ベンチャー起業論」を受講していると取り組みやすいです。																	
リンク																		
	URL																	

担当教員の 実務経験の有無	。
教員の 実務経験	シンクタンク研究員等
教員以外で 指導に関わ る実務経験 者の有無	。
教員以外の 指導に関わ る実務経験 者	企業経営、金融機関、行政等に関わる方々
実務経験を いかした教 育内容	産業分析や関連する資料収集の仕方などの説明。